



連載

地域で輝く人に聞く

File_01

SUN たなと。

大好きなここ乙原で
いつか地元野菜を使った
カフェを開くのが私の夢



永井 向日葵さん

Himawari Nagai 18 乙原



「だんだん減っていく地域の行事。このままなくなっていくのかな」—そんな想いから、自らテーマを決めて発表する高校の課題で選んだのは「過疎化地域の復興」。まちの課題に正面から向き合おうと、志手原校区地域づくり協議会に参加。地域の未来を描く計画づくりに約8カ月携わった。「まちの将来を見据えて、必死に今を変えようと動いてくれている大人がたくさんいる」。知らないことを知る毎日だったと振り返る。

中でも驚いたのは、今後の農業について話していたときのこと。「5色のアスパラガス売り出そうとか、ご年配の方がすごく楽しそうに夢を語るんです。ダメなことを嘆くのではなく、夢のあることから考える。そんな姿を見ていると私たち若い世代はもっと夢を描けるんじゃないかと刺激を受けた」と目を輝かせる。「まちづくりの課題だけを並べると若い人はさらにとっつきにくくなる。前向きなことを共有しながら考えていくことが大切」と話す向日葵さんはいつだって前を向く。

地元乙原への想いをカタチづかったのは、幼い頃からの地域とのふれあい。「小学1年生のときから、学校まで片道1時間歩く、その時間が大好きだった。朝、近所の人に出会っては、くわの実をもらったり、いろんな話をしたり。

大きくなったねって、親以外にも自分の成長を知ってくれる人がいるってすごくいい環境だと思んです」と乙原への愛情が、終始笑みとともにあふれる。

高校の課題のまとめでは、住民が誇りに思える地域にした上で魅力を発信していくことが大切—と語る。そんな地域になるようにと向日葵さんが夢みるのは、地元野菜を使ったカフェを乙原でオープンすること。「実現できる夢は描いた夢の数パーセントかもしれないけど、想い描くからこそ、その数パーセントがある。可能性という間口を狭めないことの大切さを教えてくれたのは、ずっと地元を大切に活動してきた父。私も乙原が元気であるようにできることをしたい」と夢を語る向日葵さんの真つすぐな眼差しに、乙原の可能性をみた。

向日葵ちゃんがいることで、若い子の声を聞く大切さを考えるきっかけになりました。普段大人は子どもの意見を聞く意識はあまりないと思うんです。会で彼女が中学生の意見を引き出してくれたことで、新たなつながりも生まれました。彼女の存在はとても大きかったです。



志手原校区
地域づくり協議会
事務局
しやくたに 公江 さん